慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	イスパニア大艦隊破滅談
Sub Title	
Author	箕作, 元八
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.3, No.4 (1910. 4) ,p.441(75)- 462(96)
JaLC DOI	10.14991/001.19100415-0075
Abstract	
Notes	講演
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100415-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

つた性質を有つてゐる所の生活の二方面なのである人間に特有な働が文化となつて現はれて來るのであるが其の文化も自然に對して獨立な地位を吾々に與へなかつたならば何の役にも立たないものとなつて了ふしてまた人間の努力をして唯外界に向はしむるのみであつて自分の本質の向上に向はしめなかつたらば其の文化は平板空虛なものとなつて了ふ文化作業は人が其の中に眞の我を覓める時に於いてのみ眞理であり力あるものであるのだ。

吾々の精神中に自然に對して新しい生活が起つて來ると云ふことは種々の現象の示す所で何人も承認せざるを得ぬ所であるが此等の現象を包括して全體として之を見而して其の意義を問ふ段になると困難な問題が生じて來るのである新らしい生活は明かに唯自然に添加したものでもなければ自然を漸々に作り上げたものでもないまた思惟とか感情とか云ふ一つ一つの精神力の成果でもない實に全く新にして全體を爲せるものなのであるがさう云ふ生活は如何にして吾吾に起つて來るのであらうか此の疑問を解かうと云ふにはどうしても精神生活の中に於いて人間に優越した世界生活（ウエルトレベーン）を認めざるを得ない。

（未完）

講演

イスパニア大艦隊破滅談

箕作元八

（一）

歴史家の泰斗のレオポルド・フォン・ランケが斯ういふことを言つて居ります、「航海と隣人間の爭鬪とに依て人間は發達成熟する運命を持て居る。」是は誠に能く達觀した言であります、して、海は非常に歴史上に大切な意味を有つて居りまして、隣人間の爭といふことについても、隣人といふものは陸續きでありますれば、直ぐ土地の密接した國の人々でありますが、海であると數千里を隔つたものでも互に隣人の樣な關係になつて、相互に平和的關係、又は戰鬪的關係を以て色々影響を與へて居るのでございます。それ故に世界歴史を能く通覽しますといふと、海の事に關係したことが一番大きな結果を生ずるのでありまして、海を中心とすれば影響が大變に廣く行くことが出來る。それ故に海の爭といふものはズツと昔からあるのでありまして、太古には、フェニキア人が海上を支配して居たのでありますが、それからギリシア人が起り、カルタゴ人が起り、ローマ人が起り、カルタゴとローマとの間に、非常な大きな世界的海上覇業の爭が起り、終にローマの勝に歸した。

それから後、暫く中世の頃は海事は大に忘られ、從つて大規模の貿易等が發達せず、總ての世の有樣が退歩したのでありましたが、中世の末即ち第十五世紀の末から、再び海上の活動が起りまして、所謂地理大發見時代といふ時代になりまして、ポルトガル、イスパニアの二國の國民が第十六世紀に於て海上に雄飛したのであります。それからこの二國民と大に競爭して海上に覇を爭つたのがオランダ・イギリスであります。オランダは十七世紀には海上第一の勢力を握ることになつた。次いでオランダと競爭して、第十七世紀の末

になつて、遂にこれに打勝つたのがイギリスであります。それから第十八世紀に於て、イギリスと激しく海上に競爭したのがフランスであります。しかしこの競爭に、イギリスが遂に勝利を收めまして、第十九世紀の末まで海上に優勢でありまして、從つて眞の所謂る世界政策はロシア・フランスの競爭が多少あつたけれども、まづイギリスの獨舞臺といつてもよろしいのであります。

斯くの如く、歷史上にある大事件、戰爭とか同盟とかいふものを調べて見ると、根本は海を中心とする世界政策に關係があるのであります。例へば七年戰役とか、オーストリア繼承戰役とかいふものは十八世紀に、ヨーロッパ大陸に於て起つた大事件ではあるが、尙ほ大きな所から達觀すると、これ等はやはりイギリスとフランスとの間に起つた殖民政策、卽ち世界の運命を決する、眞の世界政策の大衝突の一局部の現象と見て宜しいのであります。それで今日は、イスパニア大艦隊破滅談といふ題を掲げて置きましたが、此の大艦隊破滅の細かい歷史的事實の御話をするのではありませぬ。たゞイスパニア大艦隊の破滅といふものが、其時の歷史上にどういふ意味があつて、どういふ影響を與へたかといふことを、ザツとお話をしたいと思ひます、併し乍らその意味をお話しするには、當時の形勢をお話しなければ御分りにはなりませぬから、それから說いて行かうと思ひます。

（三）

世界の運命を決する樣な大事件には多く海戰が中心になつて居ります、サラミスの海戰、エクノモスの海戰、アクチウムの海戰、レパントの海戰、（これはトルコとイスパニア・ベネチア法王の同盟艦隊との戰）それからアルマダ破滅の中心であるグラーブリンの海戰、トラファルガルの海戰、それから最近に於て、日本海の海戰、これ等は實に世界の運命を決する樣な海戰であります。それでアルマダ、卽ちイスパニアの大艦隊の破滅は、一千五百八十八年七月下旬でありますが、この大艦隊は何んの爲めに、派遣されたのであるかと、その

譯を調べて見ますと、元來イスパニア王のフィリポ二世は、自分の屬するハプスブルグ家の勢力を以て、宇內統一的の權力を握り、又舊敎の選手として新敎を撲滅しようといふ斯ういふ運動である、卽ち二重の意味があります、卽ち政治上並に宗敎上の意味のある大事件であつて、このアルマダ破滅の戰役がこの運動の極致であつて、之に依て勝敗が決せられ、問題が解決されたのであります。元來イスパニアといふ國は、宗敎に密接の關係を持つて起つた國であります。何故かといふに、初めイスパニアは、イスラム敎のサラセン人が攻入つて、これを平定し、なほ進んで今のフランスにも侵入しようとして、フランクの爲に擊退されたのである。是は皆さん御存じの事であります、その後此イスラム敎徒の支配に從はぬ所のキリスト敎徒が起つて、彼等と激戰し、アラゴン、カスチリア、レオン、アスツリアス、ポルトガルなどといふ諸國が勃興しまして、是が段々合同してイスパニアとなり、イスラム敎徒を全く半島から驅逐するに至つた經路を見ますと、始終イスラム敎徒に對するキリスト敎徒の戰爭であつて、その建國から漸次隆盛になるまで一歩一歩と宗敎的戰爭に依つて居る。從つてイスパニア人は宗敎心が非常に盛んである。

イスパニアが統一してから、その勢が旭日の昇る如く、たゞに侵略併呑のみならず、結婚相續等によつてイタリアの南部のナポリ・シチリア、それから北のロンバイヂアや、今のオランダ・ベルギー地方や、これに接近するフランスの北部や、フランス東部のフランシュゴンテや、ドイツ西南のエルザス・ロートリンゲンの一部や、まだそれ許りでなく、コロンブス以來引續いたイスパニア人の海上活動によつて、アメリカで獲得した莫大の領土が、皆イスパニア王室ハプスブルグ家のものとなりました。加之ヨーロッパの領土は皆最繁昌富盛な地方である上に、アメリカの領土から、銀が澤山に得られるので、その採掘により、また殖民地貿易が政府の專有であつたから、十六世紀の初

にイスパニアは富國强兵を極めたのであります。當時の兵制は傭兵制度でありますから、金力が兵力を意味することは今よりも甚だしい。而して金力のみならず、此時は殊にイスパニアの勢力が盛になるに伴れ、國民の元氣が盛でありました、元氣の盛んな時には名將勇士が自然出て來るもので御座ります。されば大將には、アルバ公や、ドン・ファン・ドーストリアや、パルマ公以下數多の良將豪傑が輩出し、又當時のイスパニアの傭兵ソルダテスカは勝れて强い兵士でありました。それでフィリポ二世といふ王は、何處迄も自分は舊教の選手であると考へ、又自分が宇内統一の理想を現實すべき者であると思ひ、二つの考を持て居りました。世の歴史家の中にはフィリポ二世の事を無暗に惡ざまに罵る人が少くありません。彼を殘忍無辱で道義心が無いとか、頑固な信仰だとか申しますが、これ等の惡評は重に新教徒から出る非難であつて、どうしても公平ではありません。成程フィリポ二世は自分の理想を貫く爲めに、陰險卑劣な手段を辭さなかつた。しかしこれは當時の風潮が一般に所謂るマキアベリ主義といつて、成る可く實力を費さずに目的を達することを勤める風であつて、新教徒の巨魁のエリザベタや、ヘンリ四世でも、この點に於て餘り正直とは云はれない。フィリポ二世もその風潮に化せられ居たからであります。また宗教裁判所により新教徒に殘忍な迫害を加へたのは事實でありますが、これは彼が惡魔の如く惡む所の新教徒を天に代つて罰しようといふのである。この時代は宗教熱の非常に高まつた時であるから、これが爲めに情熱が非常に動いた時でありました。これを宗教に比較的冷靜な頭を持つて居る今の人が、直ちにフィリポの性質の殘忍な證據とするのは、間違つて居ると思います。

（未完）

それでフィリポ二世はかように宗教熱心であるから、新教徒のみならず、久しくイスパニアに住して居るモール人とイスラム教の雜種の人民やユダヤ人を迫害して國外に放逐した、然るに彼等は多

く實業に從事して居るものであるから、その結果は大にイスパニア經濟を攪亂したとは確にある、またフィリポ二世は新教徒撲滅と共に王權を擴張しやうと壓制を行つたが爲に、今のオランダ・ベルギー及びフランス西北部を含むネーデルランド人が千八百六十八年に叛旗を翻して居ります。

去り乍ら大體フィリポ二世の時のイスパニアの勢力といふものは、非常に盛になつて居りまして、フランス・トルコの戰爭に連りて勝利を得て、フランスからは和議に依て多くの利益を得ました。又最もイスパニアの勢力を附けましたのは彼の千五百七十一年十月七日のレバントの海戰でトルコの海軍を擊破したことでありますが、此海戰は、イスパニアが主力でありまして、之にベニチア共和國と法王との艦隊が加つて、總司令官はフィリポの異母弟に當るドン・ファン・ドーストリアといふ人で、トルコの方の司令長官もトルコ帝の妹婿ピアリ・パシャで、双方人種的宣教的文化的反撥の精神を以て滿ちて居ました。最も船の操縱抔はトルコ人の方が上手であつたが、最後の勝利は遂にキリスト教同盟軍の方に歸しました。此事蹟は今は細かに言ふことは致しませぬが、この勝利の影響は甚だ大きく御座います。何故なれば當時トルコ帝國は海陸軍共に頗る强くあつて、動もすればイタリアに上陸して、ローマを取り、西ヨーロッパを席卷せんず勢であり、又海賊的行爲を以て海上に横行して居る、西ヨーロッパ人は非常にこれに不安を感じました。只不安のみならず、その商業がトルコ人のためにまるで破壞されて仕舞ふのでありました。しかるに此のレバントの海戰に依てトルコの海軍力がスッカリ打壞されて仕舞つて、そうしてこの大打擊はトルコ人の元氣の上に更に大きな打擊となつて、これがトルコの衰弱した原因の一である。

これに反して此時分からイスパニアの國は段々盛になつて、此勢で愈々新教を撲滅しやうと掛つたものであります。それで其目的が愈々遂げられたかどうかと言ひますと、千六百八十八年卽ちイス

パニア艦隊の破滅された頃は、イスパニアの勢は頂點に達した時であつた。今その時分のイスパニアの勢力の概略を述べて見ましよう。

（四）

第一は、イスパニアとポルトガルとが合同したことでありますが、千五百七十八年に、ポルトガル王セバスチアノが死にまして伯父に當る大僧正ドム・ヘンリーが繼ぎましたが年を取て子が無い、遂に千六百八十年に死だ。そこでイスパニア王フィリポ二世が母方の血縁によりポルトガル主位相續權を主張しました。ポルトガル人の中にも外に候補者はありましたが、フィリポは猛將アルバ公を送り忽これを平定した。それでイベリア半島全部がこれに合同したが、イスパニアのために利益となつたのはポルトガルのアフリカ・インド・ブラジル等にある殖民地であつて、アフリカから來る收入計りが百六十萬圓も年々這入つて來る、それからインドから這入つてくる金といふものは非常なものである、其收入は一年に七百五十萬圓計りになつて居る、即ち東方のポルトガル領の金と西方のイスパニア領の銀とが、皆フィリポの手許に集るのであるから、その富は實に比類がなく、この富を以て猛な傭雇兵軍を蓄へ、四方八方へ手を出して居ります。此時分のイスパニアの勢は素晴しいもので、どうして之が成功しなかつたと疑ふ位であります。尤も殖民地經營は餘り上手ではなかつた、殖民地の自然發達といふことはしなかつたのであります。

次にフランス・イギリス・オランダは久しくイスパニアの勢力に反對して居たのである。彼等は政治上及宗教上イスパニアの仇敵である。此三國民を抑へなければならぬ、先づオランダの屬するネーデルランド地方から御話しいたしましよう。簡單に申しますと、イスパニアが非常に壓制を行つたので千五百六十八年にネーデルランド人が謀叛を起して初めはアルバ公が容易に壓したのであります。然るにオランジュ公ウィルレム一世は巨魁として百方苦心し、竟に千五百七十二年に、オランダの

北の大きな入海である、ゾイデルゼーに於て、イスパニア艦隊を破滅した、それから段々勢を得て來た。所が千五百七十八年、即ち大艦隊破滅の十年前に、アレキサンドル、ファルネーゼといふ豪傑が、イスパニアから總督に任ぜられましたが、此のファルネーゼといふ人は、後にパルマ公となつた人で、戰爭の上に名將であるのみならず政治家として大手腕のある人で、ネーデルランドの内情を洞察した。ネーデルランド南部（今のベルギー地方）の人民は、イスパニアの壓制に對して叛いたのであるけれども、宗教は舊教が多い、新教徒たる北部（今のオランダ）の人と始終軋轢をして居るのである。それ故にファルネーゼは先づ南部を懷柔してうまく北部との間を離間して、以て全部を鎮壓しようといふ方針を取つた、彼は戰爭が上手計りで無く政略が上手であるので、段々南の方の諸市がイスパニアに歸順して來た。それで北部の七州が終にユトレヒトの合同によりオランダ共和國の基を開いたのでありました、然るにオランダ人の總督であるオランジュ公ウィルレムが千五百八十四年に暗殺されましたので、オランダの勢が大に衰へた所に乘じて、ファルネーゼは頻に攻めまして、其年の内に重もなる所を段々取て行きまして、千五百八十五年に敵の最も重要な要塞であるアントウエルプ府を一年程圍んだ後陷れた。此功によりてファルネーゼはパルマ公となり、尚ほ引續いて諸所を攻取り、其鋒先が鋭いので、オランダの運命は日に逼迫して來た、それでフランス王ヘンリ三世は王弟アンジュー公を送り、イギリスの女王エリザベタは寵臣レスター伯を送り、オランダ人を助けたが、とてもパルマ公の相手にはならぬ。反つてオランダ人と爭をして歸國した。それであるから、イスパニア大艦隊派遣の時、即ち千五百八十八年七月頃は、オランダの亡滅は、時日の問題である如く見へたのであります。

（五）

その頃、フランスに對するイスパニアの勢力は、どうであつたかといふと、これも千五百八十八年

頃は素ばらしいものであつた。元來フランスは舊教の盛んな國で、その國王は國内に於ては、新教を許さなかつたが、イスパニアと勢力を爭ふ手段として、他國の新教徒と同盟し、否キリスト教の敵のイスラム教のトルコとさへ同盟して、イスパニアを惱した、さればフランシス一世や、その子のヘンリ二世王は、フィリポ二世の父カロロ五世帝と烈しく爭つて、これが爲めにカロロ五世は、ドイツの新教徒を壓することが出來なかつたのである。それでヘンリ二世の子ヘンリ九世の時、舊教徒と新教徒の爭が激烈になり、千五百七十二年バルトロメウの夜の逆殺があつて、新教徒は一時大に苦められたが、彼等はます〳〵團結し、兩教徒は負けずに對抗して居て、政府は無能で、これを如何ともすることが出來なかつたのであります。然るにヘンリ九世は千五百七十四年に死し、子がないので、弟のヘンリ三世が繼いだが、ヘンリ三世も子がなくて、末弟のアンジュー公は早世したので、ヘンリ三世が死ねば王位は王室の支流ブルボン家のヘンリ(後ヘンリ四世)に歸するのであるが、然るにこのヘンリは新教徒の巨魁であるから、これが舊教を奉じて居る多數のフランス人の爲めには、堪へられぬことである。こゝに附込んで王位を覗つたのがギーズ公ヘンリで、これに乘じてフランスを半屬國の如くしようとしたが、イスパニア王フィリポ二世でありました。

ヘンリ三世はギーズ家の跋扈に苦み、新教徒をしてこれを制肘せしめんとして、千五百八十年の末に新教徒と和睦しました。それでイスパニアの公使は、本國の命を受けて連りにギーズ公と氣脈を通じ、千五百八十五年に雙方の間に秘密協商が成り立ちました。その重な條件は下の如くあります

第一、ヘンリ三世死後彼の新教の巨魁ヘンリ。ドゥブルボンの叔父カルヂナルカロロをその繼承者とする事(これはギーズ公ヘンリが、先づ老年無能の人を立てゝこれを自由にし、且つその死後これに繼ぐべき手段である。)

第二、雙方力を協せて、フランス及びオランダの新教徒を撲滅する事。

第三、イスパニアは、年々ギーズに一百萬ボンドの金を送り、その事業を助ける事。

第四、カンブレイ及びナバラ(卽ちヘンリ。ドゥブルボンの領する王國で、フランス。イスパニアに跨つて居る小國)

第五、フランスはトルコとの同盟を解く事。

ギーズ公ヘンリはイスパニアの親類であつて、今のイタリア王室の先祖である、サボヤ公にも、新教撲滅援助の代償として、リオン市以下ローン河流域にある少からぬ土地を割き與へる約束をしました。この協商の目的が貫かれたならば、新教が撲滅せられるのみならず、フランスはイスパニアに、多くの土地を讓つた上に、爾後その保護國のやうになつたでありましよう。ヘンリ三世は連りにギーズ公ヘンリの權勢を殺がんとしたけれども反つてます〳〵勢力を失ひ、終には、ルアンに於てギーズ公の率ゐて居る舊教徒同盟會に下の事を約する誓書を取られました。

第一、新教徒を撲滅する事。

第二、非舊教徒の王位相續を禁ずる事。

第三、舊教徒同盟會の總ての決議を承認する事

第四、ギーズ公ヘンリを軍隊の總司令官とする事。

卽ち此誓書により王は全く虛位を守り實際に於てたゞギーズ公の傀儡となり終るのであります。而してヘンリ三世王が、涙を振つて此誓書に署名したのは千五百八十八年六月十五日で、卽ち大艦隊破滅の前月であります。

(六)

それから最後に申すべきは大艦隊の差向けられた當の相手のイギリスでございます。此のイギリスといふ國は、是迄どうであつたかといふと、イギリスは海事上に大に發展しつゝありました。尤もその始めには、今の道德を以て言ふと餘り正當でない方法で、卽ち海賊若くは、密貿易者として發展するのであります。といふのは、イスパニア、ポルトガルは、自分の領土に於て外國の者に貿易

かさせません、甚しきは、政府の船の外、貿易をさせない、それで密貿易が盛に行はれる、丁度イギリスが此の時分發展する時であります、密貿易をして居る所を、ポルトガルや、イスパニアの官廳に見附けられその船は擊沈され、人は賊として禁獄或は死刑に處せられるから、密貿易者の方でも武器を持て出來るだけ防禦を勤める。從て向ふに武備が無い時は海賊もする、海事大發展の時代にはさういふ事が能く行はれて、當時の人は、外國に對する密貿易、强迫貿易、乃至海賊的遠征を決して不道德な行爲とは思はないで、反つてこれ等冒險的事業を勇士の本分に合ふ壯擧と考へて居たのであります。現に日本でも足利の末頃頻々として外國に向つて、この强迫貿易海賊遠征を試みた。即ち當時支那朝鮮を苦しめた倭寇である。(尤もかゝる行爲は小規模に於てズット早くから有つたであらうが)これが海事發展の氣運が日本に起つた時代である。彼の御伽話の桃太郎に就いて色色考證もあるが、あれは我海事思想發展の精神を發揮して居るから、その時代の前後に起つたものではあるまいか。桃太郎が鬼ヶ島に寶があると聞いてこれを征伐に出掛けて行つて、鬼が抵抗するから、それと戰つて屈伏させて、色々寶物を取て歸つて來て、親を安樂に養ふといふのであります。どうもこれは海賊的遠征である。さういふ精神の時代だから日本人は冒險勇猛を以て當時外國人に知られて、オランダ人ポルトガル人イギリス人などに傭兵に雇はれた者が隨分あります。彼の山田長政流の人があつた事は、彼の歷史に見えてあります。我勇敢な倭寇は、半商半賊である。しかしこれはポルトガル人オランダ人イギリスなどが皆行つた事であります。

イギリス人は十六世紀の初頃からさういふ運動を盛んにやりました、ウイルレム・ホーキンスは僅に二百五十噸の船に乘つて千五百三十年から四十年の間に、ブラジル・ギネアにあるポルトガルの領分へ三度迄行つて密貿易をして金銀象牙其他貴重な天然物を持返つた。その子のジオン・ホーキンスも數々アフリカ・アメリカに行きつ船は、密貿易やら海賊やらをして、メキシコでポルトガルの官憲に襲はれ、乘組人過半は殺されました。また彼の有名なフランシス・ドレークは千五百七十二年に七十噸及び其以下の三隻でパナマのイスパニアの銀塊貯蓄場を襲うて擊退されたが海上で銀塊を滿載したイスパニア船を奪ひました。それから千五百七十七年百噸以下の船五隻を以て大膽にも大西洋を渡りマゼラン海峽を通過し、インドを經て千五百八十年にイギリスのプリマス港に歸着して莫大の貿易品やら奪掠品やらを持返つた。これはイギリス人が世界一週をした始であります。この海賊的行爲に對し、ドレークはイギリスの官民から大變に歡迎されまして、女王エリザベタの如きドレークの旗艦に親臨して、甲板上にてその饗應を受け、ドレークを男爵に叙し、また當時イスパニアはイギリスと表面戰爭中でないから、フイリポ二世から强硬な抗議をした中に、「太平洋は法王より許されたイスパニアの領海である」といふ言明に對し、エリザベタは「吾等は法王の命令に服せぬから、兵力を以て守れぬ場所は貴國領とは認めぬ」と答へた。その後オランダがイスパニアに叛いて、海上に連りにイスパニアの商船を拿捕した時、イギリス人はオランダ人と共同に、或は單獨にオランダの旗を樹てゝ、金銀其他を積載するイスパニア、ポルトガルの船を奪掠し、またイギリスの官民は密にオランダ人に金錢物資を送り或は義勇兵となりて參加してこれを助けて居たが、パルマ公の勢盛なのを見て、一五八五年には終に公然レスター公に一軍を將ひてオランダを援けさせました。されば、イスパニアがイギリスに對し惡感を抱いたのは無理もないことでありました。況んやイギリスは新敎の國で、舊敎を壓するのであつたから、イスパニアは遂に其國力を傾けてイギリスを征伏することになつたので御座ります。

七

この兵力を以てイギリスを屈伏するといふ計畫はフイリポ二世が親ら考へ出したのではなく、新敎

撲滅の首腦たるイギリスを打擊せねばならぬといふことだけは、イスパニア人の輿論といつてもよろしいので、これを實行するに就いて精密な計畫は餘程以前よりイスパニアの名士の内に立てられて居たのであります。

既に前述のレパントの海戰の二年前、卽ち千五百六十九年に王に建議をして居ります。その趣意はネーデルランドの反徒を平定するに絕對的必要條件は、先づイギリスを屈するにある。それには一大艦隊を起して、これを征伏するのが至當であるといふことを唱へたのでありますが、其時は丁度トルコやフランスに對する關係に忙しいのであつたから、フイリポもこの建議に同意はしたが、これを實行することは跡へ廻したのであります。其後レパントの海戰の豫備隊の司令官として大功を現はし、後またフランス艦隊を擊破して、ます〳〵名聲を揚げたサンタ・クルース侯といふ人が、千五百八十三年に、同じくこの事に關する一の建白書を出して、非常に細かい案を立て、イギリスを攻めるには是丈けの勢力が入ると、船の數から人數の事迄精しく書いてある、卽ち軍艦五百五十六隻、(其内大戰鬪艦百五十艘ガレー糟ぐ軍艦)四十艘ガレアッス(ガレーの大きなもの)二艘總噸數七萬七千二百五十噸、兵員が八萬五千三百三十二人と、外に騎兵、砲兵、非戰鬪員をも合算すれば、九萬四千二百三十二人となります。現今世界第一の海軍國たるイギリスの海軍軍人後備も入れて下士卒九萬九千六百七十九人であります。今よりは一般に各國の兵數が海陸軍が遙かに少かつた時代の戰鬪員が九萬近くあるとはその規模の大きなとの一斑が覗はれます。彼のパルコ公ファルネーゼもこのサンタ・クルース侯の案に大に贊成の意を表しました。然しこの計畫は莫大な費用を要するので、フイリポ二世もさすがにこれが實行に躊躇しました。それに彼は成る可く實力を用ゐずに如何なる手段にても目的を達する方法を取る事を理想とするマキアベリ主義の風潮に育つた人であるから、イギリスの舊教徒と氣脈を通じ、エリザベタを廢し、幽囚中のスコットランド舊女王マリアをイギリス女王とする時は自らイギリスはフランス同樣に自分の保護國の如くなるであらうと考へたからエリザベタを除く陰謀に關係し、成る可く大艦隊の事も控へることにしたのであります。それでイギリスの舊教徒はエリザベタを殺す陰謀を連りに畫策中忽ち露見したので、エリザベタは終にマリアを斬首せしめた。これは隨分殘酷のやうであるが、當時のエリザベタの境遇を考へて彼女が自衛上止むを得ざる正當防禦の手段として多少寬容してやらねばならぬ所もあります。これが千八百八十七年の事で、且つ其前にエリザベタが引續いてイスパニアに對して半公然の敵對をして居るのでこゝに至つて、フイリポもはや一刀兩斷の處置をすることに決したのであります。

この大艦隊派遣の準備は極めて秘密に行はれた。これはイギリスの不意を襲ふ爲めでありますが、かやうな大擧が全く秘密に行はれるものではありません、既に餘程前からその計畫のあることがイギリスに薄々知れて居りました。それで彼のフランシス・ドレークが政府の命を受け、千五百八十七年に、二十四艘乃至四十艘の艦を率ゐて、四月十九日に、カヂースに行つて港内に侵入し、此所に大艦隊用の物資を積載して居た運送船百餘艘を燒き、四月二十二日にリスボンに至り、こゝでは港内には入られなかつたが、港外の漁船や商船を數多捕獲して亂暴をしました。それからアソーレス諸島の邊で、東インドから物品を滿載して返つて來たサン・フエリペといふ船を捉まへて歸國しました、ロンドン人はこの船の積荷の價値の大きなのに驚いて、インド貿易の有利なことを知り、これが動機となつて一六〇〇年にイギリスの東インド商會が起されたといふことで御坐りました。

(八)

さてイスパニアの爲に不幸なことは、千五百八十八年の二月に、彼の大艦隊派遣の立案者たる名將のサンタ・クルースが死んだことです。けれどもサンタ・クルースの外にもイスパニア海軍には立

派な將校が少なくなかつたが、フイリポ二世は何故かそれを用ひないで、メヂナ・シドニア公といふ人を司令長官に擧げました、是が此艦隊の破滅する原因の一つであります。この人は位が貴い許りでなく品性も高く、勇氣もあり才智も相應にあり、陸上では名將でないまでも確かに一廉の人物であつたが、非常な天才でない以上は、海軍の事はまた特別の修養を要するもので、彼を海軍司令長官としたのは、河童を陸に上げて天狗を水に入れた樣なもので、甚だ選任を誤つたのであります。シドニア公自身にもそれを自覺して、私は海將として適任で無いからといつて再三辭退したのであるが、フイリポはたゞ此人の名聲がある貴族であることに信賴して、無理押付けに引受けさせたのであります。

此時のイスパニア大艦隊の勢力といふものは、どの位かといふに、彼のサンタ・クルース案ほどに大きくはありませんが、やはり當時のイスパニアの富を以てしても、國力を傾けて起さねばならぬ程の大きなもので、フイリポはこれにより乾坤一擲の勝負を試みたのであります。卽ち此の大艦隊は、戰鬪艦總數が七十五艘の內、この內千噸以上の軍艦が七艘ある、今から言へば、千噸以上といふのは保護巡洋艦でもあるが、其頃イギリスには二艘しか無い、それから八百噸乃至千噸の艦が十七艘、五百噸以上の艦が三十二艘、其他は略しますが、總計百二十八艘あつて、大砲の數が二千四百三十門あります、乘組人數は二萬九千二百二十二人、其外に僧侶が三百人這入つて居る、それに又貴族の從僕抔が這入つて居る、總入費が、一億八千萬マルク卽ち九千萬圓。また陸軍は本國からは送らぬが、此艦隊を以て兼ねてネーデルランドに備へてある選送艦に同所にあるパルマ公及びその部下の兵、三萬乃至四萬を載せてイギリスまで掩護して、これを首尾能くイギリスに上陸させろといふ命令である。且つイギリス人がこの大艦隊派遣の事を知つて、その準備の出來ない內に、成る丈け早く出ろといふことであります。

それで五月二十日にメヂナ・シドニア公はリスボンを發しまして、六月九日に豫定の集中所なるイスパニア西北端の要港コリウーニアに集りました。途中で暴風に遭ひまして、船が損害を受けたので、シドニアは早や氣が殂ちまして、此遠征を中止しては如何などと、弱い音を出しましたが、王が許さないで、七月二日までに出發せよと督促したので、七月十二日に至り、愈々大艦隊がコリウーニアを出發した。

通常この大艦隊をインビンシブル・アルマダ卽ち無敵艦隊といふのは、外國人が名づけたので、イスパニア人自らはさうは申しません。フエリチシマ・アルマダ卽ち最幸福なる艦隊と申しました。尤もその實際の結果は餘り幸福でなかつた。當事と何とやらは向から外れることが多いので御座います。それで此大艦隊遠征は十分宗教の意味を含み、現に十字軍と稱せられて、僧侶が三百人も乘つて居り、船中に於ては、博奕決鬪などを嚴禁し、宗教上の儀式や規定を重くして、祈禱禮拜等を怠らせず、また此頃には往々あつた妓女などを乘込ませることも、一切許さなかつたので御座りました。

（九）

一方に、イギリスの方はどうであるかといふと、前にもいふ通り、イギリス人もイスパニアの大計畫のあることを薄々傳聞して居たけれども、官民ともにその實行が左程に急になるとも想はなかつた、特にサンタ・クルースが死んだので、モウ止めて仕舞つたらうといふ樣な考を持つて餘り準備しなかつた、エリザベタといふ女王は、實に非凡な女豪傑でありますが、節儉主義の女王で、そこは女だけに華美な衣服を山程拵らえなどしたが、一體政費を惜んで、成る可く金を使うまいといふ考で、始終軍備抔を縮少して居るのであります。イスパニア大艦隊が彌々準備完成して方に出發すると聞いても、餘り驚きはしない、つまり是は示威的で實際來はしまいと思うて居た。これは女王許りではなくて、當時のイギリスの一般人民はまだまだ海洋的精神が乏しく、島國根性を脫しない、

今のように海軍思想が充分發達して居なかつたからやはり安心して居つた。

然るに海軍當局者には、當時先見のある人々が少くなく、先づ海軍元帥にはハワード・オフ・エフインガムといふ人があり、その下にドレーク・フロビッシヤアー・ホーキンス・シーモア・ウインターなどの豪傑が大勢居りました、それで大艦隊の準備が殆んど出來た、千五百八十七年の冬でありますす、其時分ハワードが、女王に向つて一の建議をして、敵の動靜を伺つて、敵の來るのを待て居ないで、反つて此方から艦隊を出して、逆襲して、敵の機先を制することを勸告したけれども、女王はそれを用ひなかつたのでありますす。それから大艦隊が彌々リスボンを發したけれども、途中で暴風に遇つて、コリウーニアに着したと聞くと、エリザベタは、もはや此遠征も全く止められるであらうと思つて、海軍を縮小しようとしたが、ハワード以下が、極力反對したので、漸くそれを實行しなかつたので御座ります。

然るに大艦隊は終にコリウーニアを發して、イギリスに攻來るといふ確聞を得て、イギリス官民はこゝに始めて今更の如く騷ぎ出しました。エリザベタ女王から非常な激勵的勅語が下りますと、さすがにイギリス人である。人民が爭つて義勇兵に加はり、忽ちの中に五萬人斗り集つたのであります。然しながら愛國心といふものは、非常に貴い強いものではありますが、併し愛國心斗りで萬事が貫けるもので無い、若し彼の名將パルマ公の率ゐた精鋭なイスパニア兵三萬乃至四萬人が、イギリスへ首尾よく上陸したらば、訓練の足りないイギリスの義勇兵が、幾ら愛國心が強くても、よく此強敵に勝つことが出來たかどうかといふことは疑問である。普通の場合迚も抵抗は出來なからうと思ひます。それでありますから、海軍當局者は十分樂觀ではありませんで、敵を海上に破つて、一歩も陸に登せまいといふ考で、海軍の準備に心血を注いで、連りにその事に付き政府に迫つたのでありました。

其時分英吉利の勢力はどうかと言へば、千百噸の軍艦が一艘、千噸のが一艘、その外はズッと下つて居る。それでイギリス海軍の内五百噸を踰へて居る艦は、タッた十四艘しかない、イスパニアの方は、五百噸以上の艦が總計五十六艘ある。尤も總數は、英吉利の方は百八十二艘であつたのでありますから、イスパニアの百二十八艘に比して、少し多い樣でありますが、小さな船斗りで、千噸以上の戰鬪艦は、イスパニアの七艘に對して僅に二艘しかないので御座りますから、數字の上では、到底抵抗することは出來ぬ樣に一寸思はれます。然し少しく立入つて調べて見るとイギリスの船は快速で、砲數が多くて、それから乘込んで居る將卒が船の操縱に熟練して居り、且つ自國の事だから、水の淺深や潮流を能く知つて居る、加之、砲術が遙かにイスパニア人に勝つて居る。是が非常な强味で御座います。さりながら物質の供給は十分で無いのには大に困難した。其の時分から既に御用商人の不埒なことが少からずあつて、海軍から絶へず政府に向つて、彈藥その他の供給の缺乏を訴へて居りました。

（十）

大艦隊は、豐臣秀吉が九州を平定した天正五年の翌年、即ち西暦一千五百八十八年七月十一日に愈々コリウーニア港を發し、同十九日午後四時頃に始めてイギリスの海岸を認めました。大艦隊はイギリス海峽に入る時、大半月形の陣形、即ち日本なら鶴翼の陣ともいふべき陣形を作り、その主力は中央にあつて、兩端の距離は六乃至七海里もありました。七月二十一日朝大艦隊は、始めてイギリスの艦隊に出會ひました。ハワードは、初より攻勢を取り、先づ敵の左翼と戰ひ、既にして敵の背後に出でゝ、その主力を攻擊し、またドレーク・フロビッシアーをして、敵の右翼の先頭に肉迫せしめた。この日の戰は八時間續きハワードは少しく利を得ました。總て戰鬪の事は今日は省略して御話致しませんが、戰爭はこれより一週間程日々行はれたが、大艦隊は兎角戰鬪を避けて、北へ北

へと進み、イギリス艦隊は常に追擊の位置を取りました。これは後に御話するイスパニアの戰略から起つて事であります。

大艦隊は七月二十七日の晩にフランスの北方の海岸にあるカレー港の沖に碇泊した。其夜半にハワードは火船を放ちて敵を苦しめ數艘を燒燬した。翌朝二十八日に至り、シドニアは、パルマ公が未だ約束通り、カレーの北のダンケルクに來て居らぬこと、否未だ運送船にも乘込んで居らぬことを知り、グラーブリン（ダンケルクの北）の方に向つた。このパルマ公が出航出來なかつたのは、オランダの艦隊がネーデルランドの海岸を封塞して居たからである。二十九日に有名なグラーブリン沖の海戰があつた。この日イスパニア艦隊は例の如く半月形の陣形を作り、ハワードは親ら敵の中央と戰ひ、ドレークとフロビッシアーは敵の左翼を、シーモアとウインターは敵の右翼を襲ひ、大艦隊は左右の翼より次第に壓迫され、陣形漸く亂れ、イスパニア人は勇敢に戰つたが、後に話す樣にその得意の戰術が行れはれず、イギリスの人の砲擊に腦まされ、終に軍艦十六艘兵員四千乃至五千を失つて敗北した。イギリスはこれに反してこの日の戰に一艘をも失はなかつたのであります。

七月三十日シドニア公は、軍氣阻喪し、彈藥缺乏しパルマ公と聯絡を得ることが出來ないから、この遠征を全く止ることゝし、これより北海に出で、スコットランドとアイルランドを迂廻して歸國して歸ることに決した。然るにこの邊の海の樣子はイスパニア人が少しも知つて居らず、勿論船を修覆することも出來ず、かゝ加へて暴風に出會つたので、始めあつた百二十八艘の中で歸國したのは、その半數に過ぎず、戰死者及び負傷病氣のために死んだ者の總數は二萬人に登りました。これに反して、イギリス人の戰死者二百乃至三百人に過ぎず、船は一艘も失はなかつたのであります。

（十四）

以上は大艦隊破滅の戰況を、極々簡單に述べたのでありますが、この大失敗に終つたイスパニア側の原因を研究して見ると三ッが擧げられます。

第一、司令長官の選擇を誤つた事。

第二、根本戰略を誤つた事。

第三、得意の戰術の行はれなかつた事。

第一に、メジナ・シドニアは、前にも述べた通り海軍に將たるべき資格のない人で、初めて船に乘つて酔ふことを覺へた程のものでありました。そのパルマ公と往復した文書に據ると、彼は聯絡の場所等に附き絶へず變更をして、一の定見もないことが分ります。その他の事についても、考が始終グラ〳〵して居て、自己の無經驗からして、自信力の乏しかつたことも分ります。グラーブリンの戰で、隨分痛擊を受けたにせよ、未だイギリス艦隊より遙かに優勢であるのに、忽ち遠征を思ひ止るといふも頗る臆病である。然し歸國するとしても、何故イギリス海峽を再び通過して返らなかつたでしようか、例へ敵に多少打擊を受けるとしても、左程甚しくもありますまい最激戰のあつたグラーブリンの戰でも十六艘を失ふに過ぎなかつたでしよう。そして多少とも敵にも損害を與へられぬこともなかつたでしよう。然るにまるで樣子の分らぬ大西洋側を迂廻して歸る方が、如何に危險でありましようか。これが臆病者の大膽とでも申すべきでありましよう。果してこれが爲めに受けた損害は戰爭の損害の數倍に登つたのであります。第二の戰略を誤つたことは、これはメデナ・シドニア公の罪では御座りません。フイリポ二世王が彼に下した訓令が根本に於て間違つて居るので御座います。今此訓令を精しくは御話出來ませんが、その中の要點だけをかい摘んで申しますと、「大艦隊の任務といふものは、ネーデルランド南部に行つて、其處にあるパルマ公と聯絡を通じて、パルマ公の軍が乘込む運送船を援護して、イギリスに渡り、これを上陸させて、且つ艦隊中にある陸兵六千人をパルマ公に渡し、其後は、ネーデルランドと、パルマ公との交通の聯絡を保つ可く、艦隊は出來得可くば、イギリスの海軍と戰ふことを避けよ」といふことで御座ります。それならフイリ

ポ二世は、自分の艦隊が、とてもイギリス海軍に敵せぬと考へて居たかといふと、決してそうではない。訓令中にもイギリスの海軍は怖るゝに足らぬと、確かに云つて居る。かやうに敵を劣勢と認めながらこれを擊破せず、成る可く戰鬪を避けるといふのは、現今の最も進んだ海軍戰略から見ると甚だ誤つて居る。卽ち今ならば、先づ敵の海軍を擊破して、海上を全く制して、然る後に我陸軍を上陸させるなり、後方の聯絡を保つなりするのが、最も安全な方法である。然るにイスパニアの策がてゝに出でなかつたのは、詰り海軍を只陸軍を輸送する道具としか見て居らぬ、まだ戰略の發達しなかつた幼稚な時であつたからであります、さすがにイスパニアの海軍にも、然るべき將校が居たからこの訓令の宜しくないことを悟り、メヂナ・シドニア公に追つたものと見えて、シドニア公から王に向つて抗議を申込んで居ります。この建言によると、先づ敵海軍を海上に尋ねて、これを擊破して然る後に陸軍を輸送しようといふことを申出して居ります、惜むべし此建言は王の許可を得なかつた。而してシドニア公には、終にかゝる攻擊的精神がなかつたのであります。第三の得意の戰術が行はれなかつたといふのは、イスパニア人の得意なのは、敵の船に乘込んで、短兵急に戰ふことであります。レパントの海戰でもこの乘込戰で勝つたのであります。然しこれは、重に彼のガレーといつて奴隷に漕がせる船の戰に行はれたのであります。然るに今は段々風帆船が行はれる樣になり、また砲術が進んで來る時でありました。卽ち戰術上に變化を起すべき時となつて居ります。然るにイギリス人はこの風帆船を動かすことが上手で、また砲術が巧妙であつた。イスパニア人は乘込戰は得意であるが、風帆船の操縱が拙である上に、砲擊が常に標準を外して、彈丸が高く飛び過ぎるので、餘り敵に損害を與へません。それ故この役に於ては、イスパニア人は常に敵船に近づいて、運りに乘込を企てるけれども、イギリス人は、近々と寄せ附けて置きながら、巧み

に船を操縱して、乘込せないで、釣瓶打に正確な砲擊を浴せかけたので、イスパニア人は、心は矢竹にはやつても、手を空くして敵の標的となるのであるから、軍氣は大に沮喪したのであります。凡そ自己が必勝の法と深く自信して居る點が無効になる程、一軍の氣を落させることはないので、昔から名將が敵に非常な打擊を與へようとする時には、敵の得意な所を挫いて、これを狼狽せしめて、以て全滅的打擊を加へる例が隨分あります。この大艦隊の敗北にも確かにかような事情があつたので御座ります。

（十二）

斯の如くして、非常に望を囑せられた大艦隊は全く破滅され終つたが、其結果は如何、是は申す迄もなく、イスパニアが國力を傾けて起した大擧の失敗である、その財力及び兵力の上に與へた打擊は非常に大きかつたので御座ります。イスパニアの粒選りの奴が二萬人も死んだのでありますから非常な痛擊に相違ありません。フイリポ二世は此報を聞いて落膽しながらも、斯う言つて自ら慰めた。「誠に是は大不幸であつた。併し乍ら是は大風の爲に木の枝が折れたやうなものである、神が幹を安全にして置いて下さる間は枝がまた生えるであらう」然し折れたのが小さい枝ならば宜いが、大きな枝が折れると、幹迄も衰へずには居らぬ。此場合は實に幹を衰へさせる程の損害であつた。衰へ始めた。これは物質上のみでなく、イスパニア人の元氣を沮喪せしめたからで、元氣沮喪は物質損害以上である。

これに反して、總ての新教國民は、大艦隊破滅の報を得て、大變勢を出した。フランスではヘンリ三世が、ギーズ公を詭殺し、その徒の復仇を恐れ新教の巨魁の彼のブルボン家のヘンリの所へ逃げて入つたが、王も終に舊教徒の爲めに暗殺されたので、彼のヘンリが王となつて、ヘンリ四世と號し、舊教徒を攻めた。イスパニアは、これを援け度くも兵力が不足であるから、ネーデルランドにあるパルマ公をして、フランスの舊教徒を助け

た。その留守中に、オランダの總督オランジウ公モリス（ウイルレム一世の子）が、連りにネーデルランドで勝を得た。かように一方を押へれば一方が起るので、イスパニアは奔命に疲れるのみで、實力が不足する。その中パルマ公が死んで、これに代るべき名將がない。されば千五百八十八年六月頃には、イスパニアの目的が九分九厘まで、貫かれかゝつたのに、七月末に大艦隊の遠征が不成功に終ると、萬事が破壞されて仕舞つたのであります。イスパニアは新教撲滅が行はれなくなつた許りでなく、自國が物質的及び精神的に衰弱し始めたのであります。

一方にフランスはます〳〵盛んになり、後ルイス十四世時代には、ヨーロッパを壓するやうになりました。また一方にイギリスとオランダとは、これより海事上に大發展をしたのであります。特にオランダは、イスパニアに代つて、一時海上の覇王となり、イスパニア、ポルトガルの領土をドシ〳〵奪取りました。イギリスは海事上初はオランダに及ばなかつた、烈しくこれと競爭し、終にはオランダを凌駕し、フランスを壓倒し、十九世紀の世界政策を殆んど獨占したことは、講演の初に申した通りであります。要するに大艦隊破滅は、世界の運命を決する大事件でありました。なほ申し殘したことは多々ありますが、何分餘り長くなりますから、今日はこれで終りと致します（拍手）。

（明治四十三年二月五日慶應義塾史學會に於て）

雜錄

教育史上の自然主義

石田新太郎

本編はモンロー氏教育史の一節を譯したるものにモンローの教育史は啻に英文教育史中の白眉たるのみならず著眼結構の點に於て他に殆ど比類なきの良書と謂ふべし茲には教育史上よりルーソーを見て自然主義運動の價値を論じそが後代の教育學說及實際に及ぼしたる諸點を明細に記載したるなり

從來の運動及び當時代と此主義との關係。教育史上に於ける自然主義の運動は其關係の重大にして影響の深大なりし事文藝復興の運動に讓らず、文藝復興によりて發展し來りたる思想卽ち「教育は書籍を研究し且つ又諸形式に通達するにあり」との教育概念を打破したるものなり、然れども思想界に於ける自然主義の運動は教育方面の運動に比して遙かに廣大なるものありされば此廣大なる知識界及社會的方面に於ける運動の眞相を明かにして始めて教育界の方面を知悉する事を得べし。

第十七世紀の後部と第十八世紀の大半とに於ては生命なき形式主義宗教道德の方面に跋扈したるが故に之に對する反動として英國に於てはかの清教徒獨逸に於ては敬虔派佛國に於てはジヤンセン派の發生を來たせり、然れども此等の運動は何れも其理想高きに失し之れを實現する事能はざりしがため、自ら亦形式主義に陷りたり、是に於て文學及社交上に僞善的言辭頻りに流行し、之れが反面には輕跳浮華の氣風駸々として蔓延せり、佛國に於ては政府社會再び昔日の勢力を保全し、國民の思想行爲の上に最も酷烈なる抑壓を加へ、皇帝又は社會の權力に對して疑問を挾むものは迫害及異端審問の法によりて所罰し、所謂邪道に流るゝものを戒めたり、貴族は亦正教の教義に對して最も深厚なる忠義を盡し之れによつて赦罪の恩典を蒙りぬ、壯嚴なる儀式華麗なる外飾によつて道德の腐敗內面の邪惡を覆蔽し社會の儀式を嚴にし、盲